

## IFERI 企画

### 「リュブリャナ大学・筑波大学交流セミナー」

#### 報告

##### 1. セミナー概要

講師：ルカ・ツリベルグ先生、ナターシャ・ヴィソチニク先生

(University of Ljubljana, Slovenia)

日程：第1回 2月9日(火) 18:00-19:00

リュブリャナ大学講師による講演

- ・リュブリャナ大学日本語講座について（ルカ先生）
- ・日本を学ぶ、スロベニアを学ぶ（ナターシャ先生）

第2回 2月10日(水) 16:45-18:00

学生研究発表および講評

- ・十二単から見る日本の色彩感覚と美意識（比較文化学類3年 三浦利恵）
- ・日本の「盆踊り」について（人文学類3年 伊東えりか）
- ・日本とスロベニアの教育（日本語・日本文化学類3年 岡田育実）

##### 2. 参加者によるレポート

###### ■三浦利恵（人文・文化学群 比較文化学類 3年）

###### 1. 第1回：2月9日（火）

第1回では、先生方や参加者の挨拶・自己紹介ののち、講師の Luka Culiberg 先生と Nataša Visočnik 先生によるレクチャーがあった。Culiberg 先生の「リュブリャナ大学日本語講座について」で特に興味深かったのはボローニャ制度の導入についてで、現在スロベニアはちょうど転換期だという。Visočnik 先生の「日本を学ぶ、スロベニアを学ぶ」では、いかに日本の伝統文化に触れたか、どのような研究をしていたか、ということが語られ、多くのスロベニアと日本、特に先生が滞在しておられた金沢の写真の紹介もあった。

その後食事会において先生方とお話しする機会があり、スロベニアについてのさまざまなお話を伺った。事前学習で食文化を調べていたこともあり、私にとってコーヒーについての話が非常に興味深かった。スロベニアでよく飲まれるのはエスプレッソだが、いわゆる「ウィンナーコーヒー」も飲むという。「ウィーンの人には『ウィンナーコーヒー』と言わない」という話があるが、先生方も「ウィーン風のコーヒー」には首をかしげ、クリームを載せる

コーヒーと説明すると納得なされた。感覚がすごくオーストリアの人に近いのだと思う。しかし一方で、ターキッシュコーヒーも家庭で一般的に飲まれているという。オーストリアのカフェ文化の影響が色濃いのだろうと思っていた私にとって、このことは大きな驚きであった。スロベニアはハプスブルク家のオーストリア帝国とオスマントルコ帝国のちょうど境目にあつたためにさまざまな文化が残っていると聞かすが、コーヒーという身近なものでそれを見ることができて、とてもおもしろく思った。

## 2. 第2回：2月10日（水）

第2回では、3月のスロベニア実習の際に現地地の学生に向けての発表する予定のものを、Culiberg先生と VISOČNIK先生に見ていただいた。私は日本文化の紹介として日本の衣服、特に十二単をテーマに選び、繊細な色づかいをすることや、配色において季節を取り込むことについて述べた。発表後は先生方にアドバイスをいただいた。反省すべきは、十二単というものに関する基本的な情報が不足していた点、その前後の時代や現在ではどうなのかという点、必要以上に固有名詞を登場させた点である。固有名詞の扱い方については、日本語を習いたての学生に向けて難しい単語を並べ立てても混乱を招くだけではないのか、と思う一方で、色や配色の名前については固有名詞を出さざるを得ないと思っていたので、英語訳をつける、簡単に意味を説明する、といった具体的な解決策はとても参考になった。また、Culiberg先生の「季節を取り入れるのはなぜか」という質問には、自分の発表が表面的であったことを思い知らされたが、「季節」に対する感覚の違いも考えさせられた。これは非常に難しい問いであると思うが、大切なのは色彩感覚や配色といった美意識だけではなく、その根源にある思想や哲学である。今後はより深い発表ができるように準備を進めていきたい。

### ■伊東えりか（人文・文化学群 人文学類 3年）

#### 1. 概要

2010年2月9日・10日の2日間で、リュブリャナ大からの講師・アドバイザー、ルカ・ツリベルク先生と、ナターシャ・ヴィソチニク先生との交流を持った。以下に両日の交流と発表について報告する。

#### 2. 2月9日

この日は予定していた18時より遅れての開始となった。まず初めに、学生の自己紹介から始まった。自身の専攻や今後の留学予定、スロベニアではどのようなことを発表し、かつ学んで帰りたいか、などを話した。その後、ツリベルク先生、ヴィソチニク先生の順番で、先生方のレクチャーを伺う。リュブリャナ大の日本語講座の概要や、自文化を知り、他文化を知ること、学んだことをどのように消化し、発表を行うかということについて学べた。

19時半からは食事会が始まり、より親睦を深めることができた。私は翌日に控えている自身の発表内容が今ひとつ固まっていなかったため、先生方にたくさん質問をした。お話を伺っ

て感じたこと、考えたことは食事会が終わってすぐ発表に反映させることができた。もちろん発表のことばかりではなく、スロベニアの料理のこと、天気のこと、スロベニア語のこともお話した。私はロシア語を学習しているので、簡単な単語はすぐに覚えられるが、発音が異なるから注意するように、というお話を伺った。私の専攻は言語学(音声学)なのだが、どうして音声を学ぼうと思ったのか、その原点を改めて思い出すことができた。ロシア語を知っているからといって驕ることなく、真っ新たな気持ちと素直な向上心を持ってスロベニア語を学びたい。

余談だが、ヴィソチク先生が召し上がっていた「ナターシャのプレート」はおいしそうだった。ベジタリアンのツリベルグ先生のお口に合う料理がもっとあればよかった。日本人は本当に肉をよく食べる、と感じた。

### 3. 2月10日

通常通り水曜 6 限に、ツリベルグ先生、ヴィソチク先生の前で自身のプレゼンテーションの発表を行った。私のテーマは「日本の盆踊りについて」である。これはスロベニアで有名なポルカから着想を得たテーマであり、日本とスロベニアのダンスについて研究できたら、という思いから設定したものである。準備不足が目立ち、先生方には大変見苦しい発表をお見せしてしまい、大きな課題を残してしまった。最終的に、「盆踊り」について話をまとめるのではなく、「舞」と「踊り」の違いから具体例を示しつつ日本の「ダンス」を紹介する、という方向にまとまった。他 2 名の受講生についても、多少の補足が加えられつつ、プレゼンの最終目標が定まった。両先生方は絶えずニコニコしながら発表を聞いてくださったので、緊張せずに発表することができた。

放課後は、前日ツリベルグ先生が特に召し上がりたいとおっしゃっていたお好み焼き屋へと向かった。ぜひ自分たちで焼きたい、とおっしゃっていたのに、注文を失敗して焼き上がった状態でお好み焼きが運ばれてきたときは、みんなで大笑いした。大変和やかな雰囲気の中での食事はおいしかった。私はここでも、翌週の発表課題になっていた、スロベニアの伝統文化についての質問をいくつかさせていただいた。特に興味深かったのはスロベニアのカーニバルのお話で、**kurent** というバケモノのような大きな仮装をして街を練り歩く風習がある、ということだった。現在受講しているスペイン語講読の時間に、中世スペインのカーニバルでも **kurent** のような仮装をして街に出る風習があったと読んだばかりだったので、とても驚いた。スロベニアは中欧と呼ばれるだけあって、ヨーロッパの様々な文化や風習の出入りが多いところなのだろうか、と思った。格安空港会社のお話も興味深かった。

### 4. まとめ

この授業に関わり、発表の準備を進めるようになってから感じることだが、日本ではスロベニアの情報を入手することが困難だ。インターネットを用いても狙っていた情報を入手することは難しいし、本を読もうにも種類が少ないし数もない。実に残念なことである。この機会に、もっと日本にスロベニア文化を紹介できたら、という思いが強くなった。私の母はスロベニアに行った折、スロベニアの方々のホスピタリティにいたく感激した、とことある

毎に言っている。私がリュブリャナ大へ留学することで、スロベニアの素晴らしさを日本に伝え、またスロベニアの方々に、日本人もまだまだ捨てたものではない、と知っていただくために、私自身が日本人としての礼儀や文化をよく身につけた上で出発しなくては、と決意を新たにしている思いである。

■岡田育実（人文・文化学群 日本語・日本文化学類 3年）

セミナー2 日目は学類生が、日本の言語・文化に関する研究発表をしました。発表時間は一人 10分程度とのことだったのですが、その後の先生方からの講評、及び質意義応答を含めると、結果的に一人約 30分の発表時間となりました。今回私は「日本とスロベニアの教育」というテーマで発表させていただきました。私の発表要旨については以下の通りです。

1. 教育の概要と特色

→学校制度、義務教育、義務教育以降の学校段階、進学状況等についての日スロ比較

2. 日本の入学試験制度について

2.1. 入学試験とは：幼稚園受験～大学院受験

2.2. 大学受験について：大学入試制度の説明

2.3. 学習塾について

2.4. 予備校について

3. 語学教育について（ただし語学教育については時間の関係上発表を割愛いたしました。）

発表後には、講師であるツリベルグ先生、ヴィソチニク先生から講評をいただきました。講評では、今回の私の発表は、まだ単なる情報伝達で終わってしまっているため、私の意見は何であり、この発表によって何を伝え、議論点をどこに持っていくのか明確にしなければならないといわれました。

今回このセミナーに参加した学類生は皆、今年の3月に「現代日本文化事情Ⅱ」という日本語・日本文化学類開講の授業でスロベニアへ2週間ほど実習に行くことになっています。実習生は実習期間中に一度、スロベニアのリュブリャナ大学の日本語学科の学生の前で日本についての研究発表を行うこととなっており、今回の発表はその中間発表的な役割を担っていました。特に3月の本番では、発表後に現地学生とディスカッションを行う予定となっているため、今回先生方に指摘された点は、発表準備を進めていく上で大変参考となりました。今後の予定としては、自分の中で発表のポイントを明確にし、「イントロダクション（研究のきっかけ、目的）」→「主題」→「コンクルージョン（発表のまとめ、議論の争点）」→「ディスカッション」という流れで発表がスムーズに進むようパワーポイントを用いたりして構成を考え直したいと思っています。

実習に行く前に、現地の先生方とこのような交流の機会が持てたことは、大変良い刺激となりました。このセミナーで学んだことを、今後の研究や発表準備に生かしていきたいと思っています。